



TITLE:

商業生産説の諸性格(上) - アダム・スミスを中心としての一考察 -

AUTHOR(S):

松井, 清

CITATION:

松井, 清. 商業生産説の諸性格(上) - アダム・スミスを中心としての一考察 -. 経済論叢 1935, 41(1): 99-112

ISSUE DATE:

1935-07-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130607>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號一第 卷一十四第

行發日一月七年十和昭

論叢

民族の周流……………文學博士 高田保馬
官吏と課税……………法學博士 神戸正雄

部落協議費の研究……………經濟學博士 汐見三郎

時論

輸入割當制に關する一理論……………經濟學博士 谷口吉彦

研究

ベルギー・フランの切下に就いて……………經濟學士 松岡孝兒

商業生産説の諸性格……………經濟學士 松井清

ディーチェル公債論の發展……………經濟學士 島恭彦

說苑

產物方について……………經濟學博士 本庄榮治郎

海外移住民考……………經濟學士 青盛和雄

ワールの農業經營集約度概念について……………經濟學士 小泉所

附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

商業生産説の諸性格 (上)

—— アダム・スミスを中心としての一考察 ——

松 井 清

こゝで商業生産説と云ふのは、商業を鑛山業・農業・牧畜業・製造工業・運輸業と同じく生産の一種類に數へる説である。この説は歴史的・理論的に種々の性格をもつて居る。それを明らかにせんとするのがこゝでの問題である。

一 緒 論

經濟學の黎明期に當つて、最初に重農主義者が、商業を不生産的であるとなしたことは周知のことである。¹⁾ 爾來商業が生産的であるか、不生産的であるかについては、種々の異つた觀點から^(註)幾度か繰返し論争されて今日に至つて居るのであるが、未だ定説が存すると云ふことは出来ない。²⁾

その長い論争の過程を通觀する場合、私は理論的にも歴史的にも、アダム・スミスの商業生産説に於て最も重要な意義を見出すのであつて、今こゝにスミスを選んで來たのは、正にそう云つた理由によるものである。

- 1) Jos, Burri: Die Stellung des Handels in die nationalökonomischen Theorie seit A. Smith (Zeitschrift für die gesamte Staatswissenschaft 1913 viertes Heft. S. 576)
2) Van der Borgh: Handel und Handelspolitik S. 35.

然らばスミスの商業生産説は如何なる點に於て重要であると云ひ得るであらうか。

第一に、スミスは重農主義者の物的生産概念を發展せしめ、客觀的であり乍らしかも普遍妥當的な抽象的生產概念を樹立し、かゝる理論的根據に於て商業を生産的であるとして居る。謂はゆる交換價值學説の下になさるゝ商業生産説が之である。かくの如き普遍妥當的な生産概念を樹立せるにも拘らず、他方にスミスは商業を以て、農業製造業に比しより少く生産的であるとなすことによつて、重農主義者の物的素材主義の殘滓を示して居る。かくてスミスは重農派から古典派への、過渡點たるの理論的、歴史的意義をもつて居る。

第二に、スミスの商業生産説の理論的根據たる交換價值學説は、彼の後に出た英佛の古典派に屬する人達、即ちセイ、マルサス、リカード、マツカーロック、ミル父子等に對して、たとひ其處に多少の部分的修正はあつたにせよ、大きな影響を與へて居る。従つてスミスの價值論に關聯してなされる彼の商業生産説の矛盾は、同時に古典派の持つ矛盾であり、後の古典派によつてなされた部分的修正は、決してその矛盾を根本的に救ふものではなかつた。この意味に於てスミスの商業生産説の批判的考察は、同時に古典派一般に對して批判的意義を持ち得るであらう。

第三に、資本主義經濟學の鼻祖たるスミスのもつ歴史的、社會的意義が、商業生産説と必然的に結び附いて居る點が注意せらるべきである。『あらゆる人が多かれ少かれ商人となる』と謂はれる彼れの『商業社會』に於ては、外面的には商業は生産的な様相を呈し、従つてかゝる點よりすれ

ば、或る意味に於て商業生産説は必然の要求であつたとも云へやう。その場合はイデオロギイとしての商業生産説の持つ歴史的地盤のみが問題となるのである事は、やがて後に示す如くである。

私は以上の三點に於てスミスの商業生産説を重要であると考へた。以下の考察もこの三點を中心として展開される事は言を俟たない。

【註】 ゲスタフ、コーンはこの觀點を二つに大別してゐる。第一が科學的見地であり第二がより廣められた國民的見地であるとされてゐる。³⁾

第一が理論的科學的に商業の生産性を解決せんとするものであり、第二がイデオロギイ的に商業の生産性を論ぜんとするものであるとすれば、私もかく二つに大別する事は當を得て居るものと考へる。

二 商業を最も少く生産的であるとすスミスの見解

スミスによつて生産的階級に數へらるゝものは、農業者・製造業者・卸商人・小賣商人の四階級であつて之等四部門に於ける勞働は、資本と交換され、利潤を生む點に於て同様に生産的なものとされる。

かくの如く、四階級を生産的階級に數へ上げたことは、重農主義者に對して、重要な批判的意義を持つものと云はねばならぬ。即ち重農主義者は、感性的に知覺し得る處の物的形態に於ける餘剩價值 (product net 純生産物即ち地代) を生産する階級たる農業者のみを生産的階級であるとなし²⁾、

3) Gustav Cohn: System der Nationalökonomie 3 BD. S. 1.
1) Adam Smith: Wealth of Nations (Cannan's ed.) Vol. I, p. 342. (邦譯は竹内謙二譯、改造社版、『國富論』に従ふ)
2) Charles Gide et Rist: Histoire des doctrines économiques p. 13 English translation p. 12.

工業上・商業上の利潤は、餘剰價值として認識されず、それは農業上に生産された唯一の餘剰生産物たる地代から引出され、窮極に於て農業階級の負擔に於てなされるものであるとされたのである。³⁾之に對してスミスは、利潤を以て（後に示す如く曖昧な形に於てではあるが）一般的に勞働のもたらず餘剰であると見たが故に、農業のみならず、製造業・卸賣商業・小賣商業の階級は、總て之を生産的階級であるとなしたのである。この限りに於てスミスは明らかに重農主義者を一步出て居るものと云ふ事が出来る。何故なら、資本主義社會に於ける生産的勞働は、必ず餘剰の生産を必要とするけれども、必ずしも重農主義者の見る如く、餘剰の生産は餘剰量の物財の生産に於てのみなされるものでなく、より抽象的な形に於てもなされることが可能であり、従つて利潤一般を餘剰として認識することは、生産的勞働の規定をより精密ならしめ、より一般化したものと云ひ得るからである。

しかし乍らスミスは必ずしもかゝる考へ方を以て徹底してはゐない。彼は農業と製造業と商業との間に生産性の段階を附し、農業を最も多く生産的であるとなし、商業を最も少く生産的であるとなすことによつて、實質的には農業を唯一の生産的階級であるとなす重農主義的見解への後退を示して居る。即ち云ふ。

『一切の資本は生産的勞働のみの、維持に充當されるが、しかも等額の資本の動かし得る生産的勞働量は投資方法の異なるにつれて、著しく相違する。之れと同様に於て、その投資が一國の土地及び勞働の年々の生産物に附加する價值も又著しく相違し

3) Charles Gide et Rist: *ibid* p. 15. English translation p. 13. 永田清譯、チュルゴー「富に關する省察」120頁參照。

て来る』⁴⁾

『しかし乍ら等量の資本と雖も、投資を異にして此種四種の異なる方法の各々に使用される時には、直接に極めて異なる量の生産的労働量を動かし、且つ此の資本の歸屬する社會の土地及び労働の年々の生産物の價值を、極めて異なる割合にて増殖する。』⁵⁾

即ちこれら四種類の投資方法は、その各々が生産的労働を動かす點に於ては異らないとしても、その動かす生産的労働の量によつて生産性の程度を異にするのである。

最大量の生産的労働を動かし、生産的労働の最上位に置かれるものは、農業者の階級であり、之に次いで工業階級・卸賣商人・小賣商人が、順次にその生産性によつて次ぎ／＼に置かれる。⁶⁾ スミスによれば農業部門に於てはたとひ其處に他の部門と等量の資本が投下されたとしても、作男は勿論のこと、役畜も亦、更に自然までが労働者として働くが故に、最大量の生産的労働が動き得るとされるのである。⁷⁾ 農業部門に於ても、他の生産部門に於けると同様に、労働者は『彼自身の消費物に相等しき價值、即ち彼等を使用する資本に相等しき價值を其資本の所有者の利潤諸共に再生産する。』⁸⁾ しかも單にそれのみに止らず、農業部門に於ては自然の働きによつて地代が生産される。この故に農業部門が最も生産的なのである。

スミスは利潤を労働の生産する餘剰であると認識し、利潤を生む労働を以て生産的であるとなす點までは、重農主義者を超えて居る。しかし乍ら地代を以て人間的労働と全く質的に異つた自然の働に歸し、利潤プラス地代を生産するの故を以て、農業労働を最も生産的であるとなす瞬間

4) Adam Smith: W. of N. Vol. I. p. 340.

5) Adam Smith: W. of N. Vol. I. p. 342.

6) Adam Smith: W. of N. Vol. I. pp. 343-344.

7) Adam Smith: W. of N. Vol. I. p. 343.

8) Adam Smith: W. of N. Vol. I. p. 343.

に於て、重農主義の素朴さに立ち歸つて居る。地代も利潤も共に労働の生産物たる限りに於て、共通の質を持つて價值にまで還元されるべきであつた。それにも拘らず感覺的な異質性にとらはれ、農業を最も生産的であるとし、商業を最も少く生産的であるとなすことは、明らかに重農主義的素朴を残してゐると云はざるを得ない。

スミスの右の如き考は、その重農主義批判の章を見る事によつて益々明らかと成る。スミスは重農主義についてかう云つて居る。

『この階級(商工階級)が自己の年々の消費額の價值を年々再生産し、且つこの階級を維持し働かす財の蓄積または資本の存在を少くとも繼續させることは承認されてゐる。しかし獨りこの理由を以てするも無生産的または不生産的な名稱はこの階級に頗る不當に適用されて居る様に思はれるであらう。』

スミスは一結婚をあげて之を例證せんとして居る。例へば父母なる二人の人数を單に補償するに止まる一男一女しか生産せぬ結婚ですら、人は決して之を不生産的とは呼ばないであらう。成程二人しか生産せぬ結婚は三人を生産する(一人の餘剩人数)結婚よりもより少く生産的であらう。しかしそれはあくまで生産的ではある。¹⁰⁾これと同様のことをスミスは農業と商工業の生産性の比較にあてはめる。だから斯かる考に於ては、餘剩を生産する部門は原則的には農業のみであり、商工業はその消費したると等價の生産のみをなすと假定されたにも拘らず、獨斷的にも生産的とされてゐるのである。

要するにスミスは商工業上の利潤を労働と結びつけ、之を餘剩として把握しておき乍ら、明確

9) Adam Smith: W. of N. Vol. II. pp. 172-173.

10) Adam Smith: W. of N. Vol. II. p. 173.

に價值の生産として規定しなかつた結果、¹¹⁾かゝる曖昧さの故に、感覺的な餘剰生産物をのみ餘剰となす重農主義的見解に部分的に眩惑されたものと云ふべきであらう。商業を最も少く生産的であるとなすスミスの見解は、從つて全く重農主義的であつて、殊に後期重農主義者たるチュルゴ¹²⁾に酷似せるのを我々は發見する。商工業上の勞働は、この限りに於て、たゞ農業生産に有用なるの故を以て、間接的に生産的意義が認められるに過ぎない。

『小賣商人の資本は、彼れの販賣する商品を仕入れる卸賣商人の資本を回轉し、且つ同時にこの卸賣商人に利潤を獲得せしむる。¹³⁾』

『卸賣商人の資本は、彼れの賣買する原始生産物および製造された生産物を仕入れる農業者および製造者の資本をその利潤を添へて回轉し、之に依つて彼等をして能く彼等夫々の職業を繼續させる。¹⁴⁾』

『彼れ(製造業者)の流動資本の一部分は、原料の購買に投下され、そして彼れが彼れの原料を仕入れる農業者及鑛山家の資本を彼等の利潤諸共に回轉する。¹⁵⁾』

かくの如く小賣商・卸賣商・製造業に投下さるゝ資本は、窮極に於て農業上に投下さるゝ資本を回轉せしむる點に於て生産的意義が認められ、之等の部門に於ける勞働の生産性は、たゞ農業勞働の生産性によつて、間接に説明さるゝに過ぎないのである。この思想は卸賣商人の三種類の生産性を問題とする場合、スミスの用ふる用語によく表はれて居る。即ち彼れが生産的勞働一般を問題にせる場合には、『生産的勞働を直接に動かす。』(immediately put into motion)と云ふ語を用ひて居るに反し、商業上の勞働の生産性を問題にせる場合には『生産的勞働に獎勵および支持を與へ

11) 堀經夫：經濟學史要論、第一分冊46頁
12) Jos. Burri: a. a. O. S. 579.
13) Adam Smith: W. of N. Vol. I. p. 342.
14) Adam Smith: W. of N. Vol. I. p. 342.
15) Adam Smith: W. of N. Vol. I. p. 343.

る。』(give encouragement and support)となし、商業の生産性は他の直接に生産的な資本を回轉せしむる事によつて、たゞ間接的にのみ認められて居るのである。¹⁶⁾

かくて商業を最も少く生産的であるとすスミスの見解は、農業を唯一の生産部門とし、製造業・商業の生産性を否定する重農主義の見解に依存してなされて居るものであつて、その意味よりしてスミスに本質的な見解であると云ふことは出来ない。スミスに本質的な見解は、彼の交換價值學説に關聯してなさるる商業生産説であると云はねばならない。

【註】農業・工業・商業の間に生産性の段階づけをなす事は、以上指摘せる如く、重農主義的に勞働の感性的な異質性にとらはれて居る限りに於て、量的比較の如く見えて實は量的比較ではあり得ないのである。従つてキャナン氏がその表面上量的比較である如く見える點に重點を置いてなす次の如き説は、吾々として全々問題にならない。

“Adam Smith seems to have entirely forgotten that the question is not whether one retailer, one merchant, one manufacturer, or one farmer employs many or few persons (to say nothing of cattle and nature), but whether a given amount of capital in the hands of a retailer, a merchant, a manufacturer, employs many or few persons.”¹⁷⁾

思ふに各部門間に於ける生産性の等級を其處に働く生産的勞働の多少を以て表現する思想は、右の如くキャナン氏がスミスの誤謬として指摘した様に、一人の農業者・製造業者・商人の下に働く勞働者數の大小を以て決定されて居るものでもなく、又キャナン氏がかくすべきものであるとして提示してある様に、一定量の資本が農業者・製造業者・商人の手にある時、各々幾何の勞働者を働かすかと云ふことでもない。勞働の生産性は質的に異なる勞働者の單なる人數によつて比較し得ることは一見して明らかである。

農業→工業→商業への發展は人類の生産力發展の歴史的段階づけとして意味を持つものであると考へられる。事實スミスも第三編第一章の『富の自然的進行』を論ずる章に於て、この段階を生産力の歴史的發展段階として把握してゐる。¹⁸⁾又フリードリッヒ・リストの農業状態から農工状態、農工状態から農工商状態への段階説も同様の思想である。¹⁹⁾

16) 向井鹿松：アダム・スミスの商業に對する思想（三田學會雜誌、17卷、7號）244頁—245頁

17) Edwin Cannan: Theories of production and distribution p. 87.

18) Adam Smith: Wealth of Nations Vol. I. p. 359.

19) Friedrich List: Das nationale System der politischen Ökonomie S. 63 Vergl. Heinrich Sieveking: Entwicklung, Wesen und Bedeutung des Handels. S. 4.

三 生産的労働の形態的規定と商業の生産性

國富の元素的形態を金銀に於て認識した重商主義者によれば、生産者は金銀を作り出す階級であつたし、國富の元素的形態を地代(純生産物)に於て認識した重農主義者によれば、生産的階級は地代を作り出す階級であつた。何らかの形に於て餘剰を生産する階級を生産的であるとす生産概念の形態的規定は、既にこの二主義にも現はれて居たけれども、¹⁾ 之等の素朴的な經濟學に於ける餘剰生産物の把握は總て物的な形態に於てのみなされたのである。

然るに國富の元素的形態を商品一般に認識し、しかも商品を一般的労働の生産物たる價値の形態に於て把握したスミスによると、生産的労働は當然に餘剰の價値を生産する労働でなければならぬと思はれる。しかし乍らスミスの労働價値説は必ずしも明確な姿を以て展開しては居ないために、生産的労働の規定もかくの如く明確に現はれてゐない。

労働價値説の創始者としてのスミスが、商品價値を使用價値と交換價値の矛盾の内に把握したことは餘りにも周知である。更らに又、素朴的な經濟學を批判することによつて、最初に科學的な經濟學の體系を樹立したスミスが、特殊的有用労働の生産物たる使用價値を經濟學の研究範圍から放逐し、一般的労働の生産物としての價値を専ら研究の對象となしたことも、幾度か指摘される處である。労働價値説によると、人間的欲望の對象たる使用價値は、價値の前提條件とは成

1) Walter Weddingen: Werturteil und Produktivitätsbegriffes in der Wirtschaftswissenschaft. (Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik) 136. BD. Heft. 4. S. 487)

るにしても、それ自體は何ら價值の量的關係の内に表現される社會的な生産關係を表現しないからである。しかし乍ら、スミスは價值をその絶對的な本質にまで掘下げるについては全く曖昧であり、多くの場合價值はその現象形態に於て相對的な交換價值として問題にされてゐる。これだけのことは生産的勞働の規定を觀察するに當つて必ず念頭に置かれなければならない。以下私は、スミスの價值論に於ける曖昧さを指摘し乍ら、彼れの勞働價值説を貫徹せんとする場合、生産的勞働は如何に規定されねばならないか、従つてまた商業の生産性は如何に判定せられねばならないかを検討すると云ふ建前で、論を進めて行きたいと思ふ。

生産的勞働を論ずる章は次の句を以て初まる。

『勞働に二種あり、一は之に勞働を用ひるその目的物の價值を増すものにして、他は何等かゝる結果を持たないものである。前種の勞働は價值を生産するから、之を生産的勞働と名づけ、後種の勞働は不生産的勞働と呼んで良からう。』

此處に不用意に用ひられてゐる價值なる語は、スミスが一般に價值と云ふ場合にはその意味を交換價值に限定して居る點よりして、一應交換價值を指すものであるとして理解しておく。そうした場合、この規定は次の如き句を以てより明らかに表現される。即ち『交換價值を増加する勞働は生産的であり、然らざる勞働は不生産的である。』一定の交換價值が、より以上の交換價值となつて現はれた場合は即ち利潤の獲得であるから、このことはとりも直さず利潤を生む勞働は生産的であると云ふ事になる。³⁾

2) Adam Smith: W. of N. Vol. I. p. 313.

3) Edwin Cannan: Theories of production and distribution p. 5. に現はれる restriction to the exchange value (富を交換價值を持つ對象に制限すること) の思想は之に該當する。

然るに交換価値とはスミスによれば『效用をもつ物の所有によつて取得する他財貨購買力』⁴⁾であり、より嚴密には、二財貨間の交換比例であつてその生産に必要な相對的勞働量によつて決定される相對的な價值である。⁵⁾かくの如き相對的な價值は自らの生産に必要な投下勞働量の變化によつてのみならず、之と交換さるる他財貨の投下勞働量の變化によつても變動し得る處の價值であり、従つて相對的價值に關聯する問題はその量的規定であり増減變化である。價值が生産さるるや否やは、更らにかゝる相對的な價值の根據に横たはる絕對的な價值についてこそ問題とすべきであつた。財貨が相互に交換され、比較衡量し得る爲めには、財貨は共通の質を持つた處の絕對的價值に於て通分されて居る筈である。かゝる絕對的價值が生産され、それが交換場裏に於て交換價值の形態をとるものであるから、生産的勞働については絕對的價值こそ問題とすべきであつたのである。だがこの點はこれだけのことを指摘するに止め、スミスの規定を更らに進んで検討しよう。

交換價值を増加することによつて、利潤を生む勞働は生産的である。而も資本の所有と勞働力の所有が分離せる資本主義社會では、或る勞働が彼れに與へられた財貨の交換價值を増加して利潤を生む爲めには、資本と交換されねばならない。故にこの規定より必然云はれることは、資本と交換さるゝ勞働は生産的であると云ふことである。生産的勞働は自己の勞働力を資本と交換することによつて自己を再生産するが、單に自己を維持し再生産するために必要な勞働量より以上

4) Adam Smith: W. of N. Vol I. p. 30.

5) David Ricardo: Political economy p. 5. (Ed. by E. C. K. Gonner)

の労働量を、資本に對して利潤として與へるのである。

或る資本家の下にあつて商品の製造に従事する労働者の労働を観察しやう。彼の労働は、加工すべく與へられた原料の交換價值に加ふるに、自己の生活を再生産するに必要なだけの交換價值と、更らに雇主の利潤を生産するのである。假りに労働者が雇主に利潤を與へることがないとなれば、雇主は直に物の製造を中止するのであつて、私的分業の支配する利潤追求の商品生産社會に於ては、利潤を生産せざる労働は續き得ないのである。労働者は賃銀を前拂ひして貰ふけれども、この雇主の支出は窮極に於ては彼の費用に屬しない。何故ならば、その賃銀に相當する交換價值は、労働者の労働が加へらるる對象物の交換價值の増加によつて、利潤と共に雇主に償還されるからである。かくて『人は若干の製造労働者を雇傭すると富裕となり、若干の僕婢を養つておくと貧乏に成る。⁶⁾』蓋し、製造労働者の労働は雇主の資本と交換さるることによつて利潤を生むけれども、僕婢の労働は雇主の収入と交換されるから利潤を生ぜず、交換價值を増加することがないのである。

自己を單純に再生産するに止まる労働も、資本主義的生産社會以外の生産形態にあつては、或は生産的労働であると云ひ得やう。しかし乍ら此處に於ける規定は、單に舊き交換價值を補償するのみならず、より以上の新しき交換價值を作り出さねばならない。労働の生産性に關する右の如き規定は、専ら生産概念の歴史的、形態的規定によるものである。それは生産手段の所有者と

6) Adam Smith : W. of N. Vol. I. p. 313.

勞働力の所有者の分離せる生産形態の下に於ける生産的勞働であつて、商品生産が普遍化せる資本主義的生產社會に於て、最も典型的に妥當する。かくの如き規定はスミスの次の諸章句に現はれて居る。

『凡そ人が其の貯への如何なる部分でも、苟しくも資本として投する處に就ては、この部分が利潤も共再び彼の許に戻つて歸ること、即ち償はれることを期待する。それ故彼は之をたゞ生産的勞働者達のみの維持にのみ投する。』

『資本として投下され消費される部分は、勞働者、製造者および工匠に依つて消費されるのであつて、彼等は彼等が年々の消費物の價值を、利潤を添へて再生産する。』

生産的勞働の右の如き規定は、勞働が具現される商品の使用價值には少しも關聯しない。生産的勞働はその内容または結果は何ら問題にされず、唯その採る形態のみが問題とされるのである。

この限りに於て商業上の勞働は勿論生産的であり、商業階級は生産的階級である。商業上の勞働が資本と交換され、商業資本が利潤を生むことは明白なる客觀的現象である。スミスはこの意味に於て卸賣商人・小賣商人を、農業者・製造工業者と並んで生産的階級に數へ上げて居る。⁷⁾ スミスは『小賣商人の資本の投下が、其社會の土地及び勞働の年々の生産物に附加する價值の全部は、彼小賣商人の獲得する利潤のみに存し、彼の資本の投下は彼の獲得する利潤以外には其社會の土地及勞働の年々の生産物に價值を附加することがない。』¹⁰⁾となし、小賣商人が生産的階級たる爲には單に利潤を生むを以て足ると云ふ思想を明らかに示してゐる。

7) Adam Smith: W. of N. Vol. I. p. 315.
8) Adam Smith: W. of N. p. 320.
9) Adam Smith: W. of N. p. 340.
10) Adam Smith: W. of N. Vol. I. p. 342.

生産の基準を交換価値に求め、生産的労働の形態的規定によつて商業を生産的階級に屬せしむる事は、爾來僅かの例外を除き古典派に於ける傳統となつて居る。¹¹⁾

しかし乍らかゝる形態的な生産性のみによつては、商業の生産性の問題は解決されたと云ふことは出来ない。価値を生産するや否やは、個別的労働として見た労働の直接的生産過程にのみ限定された問題であるから、商業上の労働が流通部面をも含んだ總生産過程に於て利潤をもたらすと云ふことは、嚴密な意味に於て商業を生産的であるとなす根據とはならないのである。交換価値を増加し利潤を生むの故を以て直に、商業を生産的であるとなすとすれば、その議論は明らかに生産過程に屬する価値および餘剩価値の概念と、流通過程に屬する交換価値および利潤の概念とを混同せるものであると云はねばならない。

吾々は此處に於て商業の生産性の問題は、更らに交換価値の奥に存在する處の価値發生の根據にまで遡らなければならぬ事を知る。それは謂はゆる價值論固有の問題である。

【註】 例外とはジエームス・ミルが、その著名なる四分説（生産・分配・交換・消費）に於て、商業を生産に於てではなく、交換篇に於て論じて居る。¹²⁾ 又 J. S. ミルは獨立の企業としての商業は生産編で論じ乍ら他方第三編の交換編に於ても商業を論じてゐる。¹⁴⁾ が之等の例外を除けばスミス・マルサス・マカーロック・セイ等、總て商業を生産編に於て論じて居る。

（未完）

- 11) Jos. Burri: a. a. O. SS. 636-637. 飯島幡司、商業は生産なりや（國民經濟雜誌19卷、6號、94頁）
12) James Mill: Elements of political economy p. 87.
13) J. S. Mill: Principle of political economy p. 42.
14) J. S. Mill: ibid. pp. 574-581. Vergl. Jos. Burri: a. a. O. S. 591.